

平成 28 年 4 月 5 日

入学生の皆さんへ ～平成 28 年度入学式にて～

九州工業大学 学長

尾家祐二

ご入学おめでとうございます。

春爛漫の今日、ここに入学式を挙げるにあたり、栄えあるこの日を迎えられる諸君に、心からお祝いを申し上げます。そして、これまでのご努力に敬意を表します。国立大学法人九州工業大学に諸君を迎えることができましたことは、この上ない喜びであります。御列席の御家族の皆様におかれましても、お喜びのことと拝察致します。教職員を代表してお祝い申し上げます。

最初に本学の歴史を簡単に紹介します。

これから諸君が学ばれる九州工業大学の前身は、1907 年に創設された私立明治専門学校です。創立者である安川敬一郎先生は、わが国の産業の礎となった北九州及び筑豊地域で様々な産業を興された経済界の重鎮です。安川先生は、「国家によって得た利益は国家のために使うべきである。」という信念から巨額の私財を投じられ、我が国の産業の振興を支える技術者を育成する明治専門学校を創設されました。安川先生は明治専門学校の教育と研究を、東京帝国大学総長であられた山川健次郎先生に託されました。山川先生は、開校式において、明治専門学校を「技術ニ通ジテイルジェントルマンヲ養成スル学校デアル」と宣言され、品格と創造性をもつ人材を輩出することを目指されました。この山川先生の理念は、「技術に堪能なる士君子の養成」という本学の基本方針として、100 年以上の歴史を越えて脈々と伝えられ、現在に至っています。新入生の諸君は「技術に堪能なる士君子」という言葉をこの場で覚えて頂きたいと思います。

明治専門学校は、その後 1949 年に国立九州工業大学となり、2004 年から国立大学法人九州工業大学となりました。この間に、飯塚市に情報工学部が設置され、今年度 30 年目を迎え、若松の北九州学術研究都市に大学院生命体工学研究科が 16 年前に設置され、2 学部 3 学府・研究科、学生数約 5800 名を擁する、わが国有数の個性豊かな工学系大学となり、現在に至っています。

「技術に堪能なる士君子」という理念の下で育った諸先輩は、いずれの時代でも産業界や学界で高く評価され、わが国の産業の発展に貢献してこられました。入学生の皆様は、100 年以上も昔の言葉ということに違和感を抱かれるかもしれませんが。九州工業大学は、この言葉をそれぞれの時代に相応しい姿に解釈し、時代が求める人財を社会に輩出し続けてきました。そして、現在でも、質量ともに、常に全国でトップレベルの就職実績を誇っています。これは、採用される企業等が、本学の教育および学習支援活動を高く評価して頂いている証

であると思いますし、先輩諸氏が築いてこられた信頼の絆があればこそ、さらには信頼の基盤の上にこそ実現できていることであると感謝しております。

それでは、ここで、これから学び続けるうえで大事な二つのことについてお話をしたいと思います。それは、学ぶ姿勢と学びの原点に関することです。

今年に入って、科学界で大ニュースがありました。100年前に、アインシュタイン博士が提唱した一般相対性理論で予想された重力波を観測できたというニュースです。その内容については、ここでは触れませんが、そのアインシュタイン博士は、数多くの名言等を残されています。その中で、「大切なのは、疑問を持ち続けること」という言葉を、ここに紹介したいと思います。「イノベーションのDNA」という本の中でも、アインシュタイン博士が、『正しい質問さえあれば・・・正しい質問さえあれば』と、いつも繰り返し、『解答よりも、問題を提起することの方が重要であることが多い』と述べていたことが、紹介されています。

さらに、質問することの大事さは、紀元前の中国の書物「易経」で、すでに示され、「学問」という言葉がその書に記されています。学問という言葉は、「学ぶ」とことと「問う」とことの2つから成り立っています。今の時代では、「学んで」知識を得ることができ、「問う」とことによって、はじめて自分の知識にすることができる、とも理解できると思います。「問う」とことは、大事な学びの姿勢です。諸君は、これまで入学試験を含み様々な試験を受けられたと思います。そこでは、問題が与えられ、その問題を解き、答えを導き出すことが求められていたと思います。しかし、これからは、まず、何が問題であるかを考えてください。あることに疑問を持つことが、それを理解することに繋がります。よい問いがよい学びの出発点です。

「問う」とこと以外にもう一つ、大事なものがあります。それは、学習活動を起こさせる源になるものである知的探求心です。知識もスキルも知的探求心から引き起こされた学習活動によって得られるものです。したがって、それを強く持ち続けて頂きたいと思います。それが枯れては、学び続けることができませんし、その成果となる新たな知識やスキルも得ることができません。本学は、それを持ち続けることを支援したいと思います。

さて、次に、皆さんが学び、活躍し続けていく、この時代の特徴を知るために、近年の科学技術の進歩に目を転じて見ましょう。その進歩は目覚ましく、20世紀には多くの発見・発明がなされ、夥しい数の技術が生み出されました。そして、それらの成果は加速度的な速さで、社会へ普及し、生活に浸透しています。例えば、今のインターネットは、まだ50年も経たない、1969年の米国における小規模な実験が始まりです。それが、今や、世界的なネットワークになり、私たちの様々な社会活動の重要な基盤になっています。そして、2020年

にはコンピュータ、家電、カメラ、センサー等様々な機器が繋がり、その数は500億個以上にも及ぶと予想されています。まさに、ネットワークは地理的な距離を乗り越え、国境を乗り越えて、多くのものや人を繋げ、様々な社会活動のグローバル化を可能にしてきました。このように、科学技術は私たちの社会生活と密接に繋がり、その役割の重要性はさらに増しています。もう一つの例として、近年の人工知能の発達にも目覚ましいものがあります。九州工業大学もロボットや車の自動走行技術に関する研究を推進しておりますが、近い将来、様々な仕事が自動化される可能性があります。そのことによって、私達の、暮らし方、仕事の内容も変わっていきます。今ある職業の中で、無くなるものもあるでしょうし、今は無い多くの職業が新たにできることでしょう。そして、皆さん達こそが新たな職業を創り出すことになるでしょう。皆さんが活躍する時代は、そのような時代です。

九州工業大学は、皆さんが、このように、変化が激しい時代に、高度な技術者として生き生きと活躍し続けることができるように、教育、学習支援を見直し、改革を行っています。その一連の改革プログラムを、「社会と協働する教育研究のインタラクティブ化加速パッケージ」と呼んでいます。この教育改革パッケージは、これまでお話してきました、「問う」力、知的探求心そして変化に富んだ社会と関連しています。これまでの大学および大学院教育では、知識とスキルの獲得に強い関心が向けられていましたが、本学では、それらとともに、卒業、修了後も継続して新たな知識、スキルを学び続け、それを活用できる能力を培うことの重要性に配慮しています。獲得した知識とスキルを活用することができる能力をコンピテンシー(competency)と呼びます。そして、グローバルな環境で、自らが持つ知識とスキルを活かし続ける能力を **Global competency for Engineer**, 省略して **GCE** と呼んでいます。この **GCE** という言葉も、本日覚えていただきたいと思えます。

GCE 獲得のために、大学ができることは、様々な学習機会を提供することと、それに合った学習環境を整備することです。学ぶ主役は、みなさんです。本学では、**GCE** を5つの要素から成ると定義しました。多様な文化の受容、コミュニケーション力、自律的学習力、課題発見・解決力(探求する力)、そしてデザイン力です。そして、これらを身につけるためには、まさに「問う力」が大事であると考えました。パッケージ名称に「インタラクティブ化」という言葉を用いています。その「インタラクティブ化」した学習とは、多様な問い、対話、相互作用を生じさせるような交わりを通じた学習を指しています。本学キャンパス内はもちろん、海外の大学や企業において、様々な交わりを通じた学習を経験し、成長して欲しいと願っています。

本学の新しい取組は、着実に成果を上げています。例えば、学生諸君の海外

研修プログラムについて言えば、昨年度は約 440 名もの学生諸君が海外派遣を経験しました。そのうち、約 40 名は、海外の企業でのインターンシップを経験しています。海外研修を経験した学生は、帰国後、学びに対する考え方や行動までもが変わり、大きく成長していきます。本学では、海外研修は、もう特別なことではなくなりつつあります。是非、皆さんも積極的に参加してください。また、本学は、自律的な活動、学習を奨励しており、学生諸君は様々な課外活動や部活動に取り組んでいます。論語にも「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」とあります。楽しむということは、自ら、主体的に取り組む、心から関わるという点で大事です。正課外の学習として、学生が自ら自動車、ロボット、人工衛星、ロケットなどの製作を行い、国内外の競技会にも参加しており、大学も支援しています。課題を発見し、解決するために、講義などで学んだ抽象化された知識、体系化された知識を、いかに活用できるか、またさらに何を学ぶ必要があるか等を考えるという学習のプロセスこそが重要であると考えます。是非、皆さんも挑戦してください。

このような学習を通じて、自律し、興味を持ち続け、挑戦する工学系人財となられることを期待しています。

私は、この 4 月に学長に就任いたしました。学長としては、皆さんと同じ新人です。立場は異なりますが、新鮮な思いを持つことは共通するのではないかと思います。今、私は九州工業大学をたくさんの方が訪れる、訪れたい大学にしたいと考えています。産業界との連携、産学連携、は本学の特徴であります。すでに、教育改革に役立てるため、企業の人事部門の方々を本学にお招きしてご意見を頂くような取組も始めています。また、産学連携研究を通じて、多くの研究者の方に本学を訪れていただいておりますが、海外からも更に多くの研究者や留学生を受け入れたいと考えています。地域社会とも連携し、地域および小中高校生の方々も学びのために本学を訪れていただきたいと思っています。そして、そのような多様な交わり、相互作用から、多くの成果や喜びが生まれると考えています。

最後となりましたが、入学された諸君が、健康に十分留意され、様々な学習機会と環境を活用し、意義ある大学生活もしくは大学院生活を過ごされますよう重ねて希望致しまして、告辞と致します。本日は誠にありがとうございます。